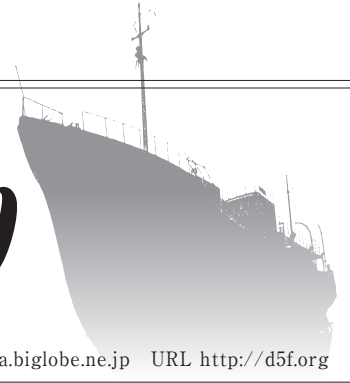


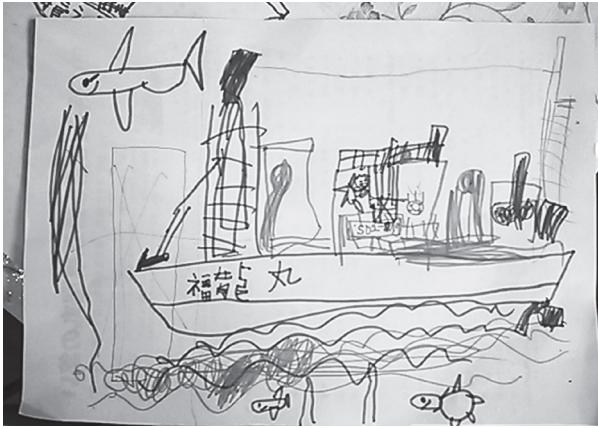
2014.07.01
No.382
(7・8月号)

福竜丸だより



発行：公益財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島2-1-1 〒136-0081 第五福竜丸展示館内
Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail：fukuryumar@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org

5月の連休には大勢の家族連れでにぎわった夢の島公園。バーベキューにきた子どもたちが来館、船とマグロの絵を描いてくれました。6月中旬にも再度あらわれてすっきり展示館が気に入った様子で再び絵を描きました。



被ばくから60年

明日につながるこころ

四月下旬から六月初旬までは展示館の修学旅行見学がピークのシーズンです。

入場する生徒たちの前にそびえるようにどっしりと据えられた第五福竜丸の船体。その大きさ、古びて存在感のある木目に目を止め感嘆の声を上げながら整列する生徒たち。ボランティアからの話にも熱がこもります。

事件から遠く隔たった世代の若者たちに第五福竜丸の被ばく、ビキニ事件はどのような受け止められ、現在から明日へとつないでいけるのかとの思いで生徒たちを見つめ語りかけます。

生徒たちの感想文から…。

船はその時代を生き延びた人それぞれの思いがよせられており、どの場所から観ても圧巻でした…展示されているすべてのものが「このよなことは二度とあってはならない」とうたっているようにとても心に響きました。展示物の中に署名運動などの

活動資料がありました。私も将来このように協力しあえる人間関係をきずき大変なことでも乗りこえられる大人になっていきたいと思いました(和歌山・中学3年)。

第五福竜丸から教えていただいたことを心に刻み、平和な国は難しいので、まずは平和な学級を築きたいです(福島・中学3年)。

この事故により多くの人々の生活が今も脅かされています。放射能の悲劇は私たちの記憶に刻まれることになりました。もう昔の話ではありません。放射能の恐ろしさを知った今、私たちにできることは何でしょうか。つらい現実にはち向かい伝えてくださる方がいらっしやいます。その勇気と生きる力を受け止め、正しく知ること、そして放射能の被害を遠いところの話と思わず伝えていくこと、これが私たちにできることです(岐阜の中学生の平和宣言より)。

放射能は「憎い」から「怖い」へ

——ビキニ60年に三浦で記念集会——

森田 喜一

平成二六年四月二十日、三浦で行われた「ビキニ被災六十周年・三浦市民集会」は、市内外から四百人を越える人達が集まり、集会は熱気を含んで大成功を納めました。ビキニ事件の記憶が薄れかけていた三浦市民にいったい何が起きたのでしょうか。

全国一の漁業被害

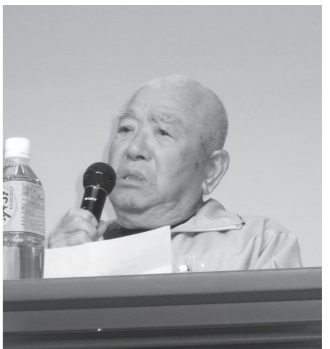
昭和二九年三月、三崎漁港を巻き込んだ放射能による魚価の低迷騒ぎ（三浦でのビキニ



二事件)は、当事者の漁船員、魚商だけにとどまらず、漁業に關連した事業者、さらには町の財政にまで影響を及ぼしました。せつかく獲ってきたマグロを捨てなければならなかった漁船員はもとより、魚価の低迷により生活の基盤をガタガタにされ、倒産に追い込まれた事業者もあつて、三崎町の多くの人達が放射能を憎しみ、恨みました。

再びの放射能禍に ビキニ事件を見直す

平成二三年三月十一日に発生した東日本大震災による東京電力福島第一原子力発電所の事故は、三浦市民に大きなショックを与えました。連日報道される原発事故の放射能情報に放射能の持つ怖さを改めて思い知ったのです。そして薄れかけていた六十年前の放射能の記憶が蘇え



元マグロ漁船員の証言

り、さらには当時とは全く次元の違う恐ろしい放射能がそこにあることを知りました。「放射能のことをもっと知りたい」、これが市民集会に多くの人が参加した原動力となりました。

その前兆はありました。

市民集会に先駆けて二月二三日に行ったプレ企画のドキュメンタリー映画「放射線を浴びたX年後」上映会に、実行委員会が予想した百人をはるかに上回る百六十人もの人達が集まり、約八割の人がアンケートに回答し、回答者の半数が感想を書いたのです。これは異常ともいえる反応です。映画を鑑賞した多くの人が「市民集会にも行く」と言ってくれました。これは「ビキニ事件を思い出した」のではなく、放射能のことをもつ

と知りたいという、これまでになく新しい動きでした。

「あのときのこと」ではなく「これからのこと」を知りたい、という市民が多かったのです。

ですから、市民集会での記念講演として、講師をお願いした立命館大学名誉教授の安斎育郎氏の講演は参加者の圧倒的な支持を得ました。三浦で開かれた講演会で、これほど多くの共感を得た講演は前例が無いといつていいほどの成果でした。

この講演のあと行われた、広島で原爆を受け九死に一生を得た元陸軍幹部候補生の被爆体験、ビキニ事件を体験した元漁船員の話、福島で被災した主婦の体験談は、三者三様の怖さがありました。漁船員は「放射能はおつかねえ」と率直に発言しました。(この船員はビキニ事件の年、四回マグロ漁に行き、四回とも船体から放射能が検出され、うち二回は一部のマグロを廃棄、馴染みのバーでは「灰かぶりは帰れ」と言われた体験を持っていきます)。

参加者の一人に福島生まれ、広島育ち、現在三浦在住という方がいましたが、この方は「怖さと、郷愁が入り混じり涙が止まらなかった」と感想を寄せてくれました。

水爆反対、原発反対と叫んでも世界的にはじわりじわりと増え続けている現実の中で、どう自分の身を守っていくのか、個人一人一人が真剣に考えなければならぬ時代になっていることを、今回の集会の成功は物語っていると

思います。原発事故は再発しないという保証はどこにも無いのです。

(もりた きいち／三浦市在住フリーライター、第五福竜丸平和協会専門委員)

◆三浦市民集会の記録集刊行
ビキニ被災60周年三浦市民集会の実行委員会から記録集が出されています。記念講演のレジュメ、元マグロ漁船員の証言、参加者のアンケート。感想をはじめ集会にむけた実行委員会のとりくみの記録が収録されています。問い合わせは第五福竜丸平和協会まで。

核大国への 不信は深く 三浦ともみ

今年三月、原水爆禁止日本協議会(原水協)や第五福竜丸元乗組員の大石又七さんとともに、ビキニ水爆実験で大きな被害を受けたマーシャル諸島ロンゲラップ島を訪れた。被ばくから六〇年がたった今も住民が戻れない島の姿に、約一三万人の避難が続く原発事故後の福島が重なって見えた。

白い家

首都マジュロから飛行機で約一時間半。ロンゲラップ環礁にあるロンゲラップ島に着した。空港から車で数分走ると、ヤシの木の合間に白い外壁の家が見えてきた。開けた土地に、すべて同じ規格の平屋建て約五〇戸が並ぶ。

島に常駐するロンゲラップ環礁自治体のフレッド・アンジャインさんによると、家は米国と自治体が合意し、九八年から工事が始まった「再定住計画」に基づき建設された。福島でも現在工事が進む「災害公営住宅」に似ている。

だが、住んでいるのは島で働く作業員やその家族。一般の住民はいない。垣間見える、実験。到着した翌日、フレッド・アンジャインさんに島を案内してもらった。家が並ぶ中心部を離れ、除染されていない地区に入ると、幹に青いテープが巻かれたヤシの木が数本あった。テープにはそれぞれ番号がついている。フレッドさんの説明では、米エネルギー省の職員が数カ月に一度島を訪れ、テープの巻かれたヤシの木や、島の動植物を調べているそうだ。

エネルギー省はそのほかに、定期的に島にいる人の内部被ばく線量を「ホールボディカウンター」という装置で検査している。原水協の聞き取り調査では、全員が内部被ばくについて「検査でエンマン(マーシャル語で「良い」の意味)」と言われたから大丈夫」と説明した。ただ、島で仕事をすると夫と長男と暮らす女性は「ずっとここにいたいかは分からない。放射線が心配だから」と話す。

米国は、マーシャル諸島で一体どれだけのデータを集めているのだろうか。六〇年たった今も、実験の影響を調べ続ける核大国の姿が垣間見えた。

不信、今も

飛行機を降りたとき、持って行った自分の線量計で測った空港の空間放射線量は1時間当たり0.04マイクログロシーベルトだった。日本の首都圏の平均的な値に近く、決して高いとはいえない。だが、除染されたのは島の一部で、

「再定住計画」に基づく住宅



「再定住計画」に基づく住宅

線量を確かめるモニタリングポストもない。島で暮らすフレッド・アンジャインさんでさえ「自分の年齢なら気にならないが、もし娘や孫が『来たい』と言ったら断る。若い人には安全だとは思えない」と語った。

ビキニ水爆実験では、ロンゲラップ島に当時住んでいた八二人が被ばくした。米国は住民を避難させたが、五七年に島に戻した。だが流産やがんの発症が相次ぎ八五年、住民自身の意志で再び島を離れた。

二度にわたり苦難を強いられた経験から、米国への不信感は簡単に消えるものではないのだろう。

福島でも日本政府が「除染が進み放射線量が下がった」として避難区域を縮小し、立ち入り禁止だった場所への住民帰還が進む。だが、なし崩し的な「安全宣言」を信じない人は依然多い。

福島の六〇年後は今回の取材で、福島もロンゲラップも「住民不在」で進められる復興政策が共通の問題だと感じた。

同じ規格の家がただ並び、生活の糧であったヤシの木が利用できない、元の姿からかけ離れたふるさと。データ収集が目的なのか、住民の健康を守る事が目的なのか分からない内部被ばく検査と、米国が一方的に押しつける「安全」……。

原発事故後の福島に来たこともあり、今回一緒に島を訪れたロンゲラップ自治体選出の元国会議員、アバッカ・アンジャイン・マディソンさんは「米国は住民の苦しみや不安に、本当の答えを与えてくれないままだ」と嘆いた。

六〇年たっても、加害者であり、巨額の予算を投じて補償や復興政策を進めてきた米

国と住民の間に深い溝があることをうかがわせる。

「住民に寄り添って」。日本の政治家が福島について語る

とき、この言葉を頻繁に使う。だが、現状は全く異なっている。住民が置き去りのまま、福島はどんな六〇年後を迎えるのか。ロンゲラップ島で何度も頭をよぎった。(みうら ともみ／共同通信社記者)

第五福竜丸元乗組員 大石又七さん 体験語り30年

五月三日、第五福竜丸元乗組員の大石又七さんが和光中学を訪れました。三〇年前の一九八四年、大石さんは和光中学の生徒と出会い、初めて体験を語りました。ビキニ事件から六〇年がたち、生徒たちとの出会いから三〇年がたちました。

講堂には中学三年生と高校の歴史のクラスの生徒たち二〇〇人余、そして数人の保護者が集まりました。大石さんは展示館の市田真理学芸員によるビキニ事件の解説に続いて、三〇年前を振り返りながら現在の思いを語りました。

講演活動のきっかけ

つづいて大石さんと和光中

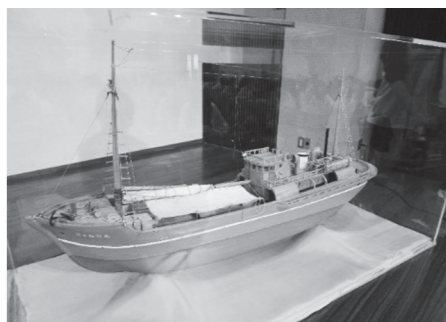


熱心に聞き入る生徒たち

学生の出会いに関わった和光中学講師の榊葉文枝さんからお話がありました。「ビキニ事件が起きてから三〇年、大石さんは事件のことを殆ど語らずに自分の胸のなかにひっそりと収めて生きてこられました。でも、もうあんなことが起こらないようにと思っていた時に、和光中学生と大石さんは巡りあいました。それがきっかけで大石さんは語り始めました。黙して語らなかつた三〇年、その後の三〇年、体の具合が悪くても忙しくてもずっと語り続けてきた三〇年、その六〇年の話を伺います」。

若者へ大石さん希望を語る

「和光の皆さんこんにちは、三〇年もたつたと聞いて自分自身びっくりしています。六〇七人の生徒が文化祭の研究のために乗組員に話を聞きたてました。その生徒たちはとてもしつこくて、駄目だと言っても何度も電話をかけて、諦めてくれません。しかたなく、ちょっと話せば済むだろうと思つて展示館へ出かけ話をしたのが始まりです。やれやれと思つていると、その後、和光中学に模型船を寄贈しに向くことになり、そのことをマスコミが聞きつけ取材にやってきました。ビキニ事件は政治や核問題なども難しいものですが、三〇年の長い時間を経る間に、独学で勉強したり専門家について聞いて少しづつわかつたこの事件が如何に重要なもので、個人の問題では無いことが理解できました。そうして今日に至るまで語り続けてきたというわけです」。



和光中学に寄贈の福竜丸模型

生徒たちは大石さんの言葉ひとつひとつを聞き漏らすまいとするように真剣に聞いていました。事前学習で抱いた疑問点だけでなく、実際に話を聞いての質問も活発に寄せられました。

生徒たちが事前の学習で一緒に感じていたのは「大石さんにとって今まで一番苦しかったことは何か」ということです。大石さんは、自分たちはアメリカの実験で放射能を浴びて被ばくしているのに、それが無かつたことのようにされてしまうことが一番苦しいと話します。大石さんの争いに一方的に巻き込まれ、大石さんたち漁師たちが訳もわからないまま受けた被害を、アメリカはその実験を

続けるためになかつたことのようにしてしまつた、そのことが一番悔しいんだと大石さんは優しい口調で生徒たちに話しました。会場からも大石さんの話を聞いての質問が活発に寄せられました。「今も核開発をやめないアメリカをどう思うか」という問いに対して、「人間は核兵器を一度持つたら断そうとせません。どこかで断ち切らなければならぬのですが、今の大人にはできません。これからの若い君たちが先のことを考え勉強して行動に移して欲しい」と大石さんは答えました。これまでの六〇年間、そして自身の活動の三〇年間を振り返つて、子どもたちにこれからの未来に目を向けていってもらいたいと願う大石さんの気持ちが込められているようでした。(編集部)

*大石さんが作製した第五福竜丸模型—30年前に和光中学に初めて話した時、目の不自由な生徒に船を知ってもらおうと、約半年をかけて自ら図面を引き材料を集め製作。

大海原こえた友情

—ジョン・アンジャインと小宮茂雄—

澤田 猛

再会に五七年の歲月

今年にはビキニ水爆実験から六〇年。「三・一ビキニデー」に合わせ、現地・マーシャル諸島をはじめ、日本各地でもさまざまな記念シンポやイベントが開催されたが、マーシャルの被曝第一世代の多くは高齢化し、鬼籍に入っている人たちが少なくない。

その中で最も有名なマーシャル人被曝者は被曝当時のロンゲラップ島の村長、ジョン・アンジャインさんだ。アンジャインさんは被曝後遺症に苦しむ島民の現状と核廃絶を訴えるため、たびたび来日。二〇〇四年に八一歳で亡くなったが、ご記憶されている方はまだ多いと思われる。

アンジャインさんと戦前から親交のあった小宮茂雄さんという方がいた。小宮さんも一昨年、九〇歳で天寿を全う



57年ぶりに再会した小宮茂雄さん(左)とジョン・アンジャインさん(マーシャル諸島・イバイ島で1997年8月8日、小宮茂雄さん提供)

*展示館では澤田さんとフォトジャーナリストの島田興生さんの監修による小宮さんの遺品の特別展示を8月中旬から9月末までおこないます。

されたが、二人の友情は太平洋戦争によって引き裂かれ、再会するのに五七年の歲月を要した。小宮さん宅には戦前

からのものを含め、アンジャインさんからの十数通の手紙が残された。手紙は公開されたことはなかつた。小宮さんの人となりと手紙の一部を紹介したい。

ロンゲラップ観測所

小宮さんは一九三九年に海軍水路部に入り、ロンゲラップ島の気象観測所員として派

遣され、約一年半、観測業務に就いた。

マーシャル諸島は戦前、日本の統治下にあり、観測データの収集は太平洋戦争の開戦準備と深い関わりがあつたという。

同島で日本語ができたのはアンジャインさんだけ。観測所では彼を飯炊きや雑用係として雇い入れた。二人の出会いはいこうした縁からだった。

小宮さんは非番のとき、小舟で海岸から漕ぎ出し、潮に流されて沖合に引張られていくのをアンジャインさんが目撃。泳いで舟に乗りこみ、舟を上手に操り、危機を脱出した。小宮さんは終生、この恩義を忘れなかつた。

観測所勤務から帰還、待ち受けていたのは召集だった。将校教育後に旧満州(現中国東北部)ハルビン特務機関に転属。敗戦後、シベリアに抑留され、帰国は一九五六年。帰国後は働き詰めに働いた。

マーシャルへの手紙

そんな折、思い出されたのが同い年のアンジャインさん

の安否だつたという。アンジャインさん来日を報道で知り、ツテを求めた結果、現住所が分かり戦後初の手紙を書いたのは一九九六年だつた。「ワカレテカラ モウ56ネン タチマシタ オゲンキデスカ ビキニ スイバク ジッケンデ ロンゲラップガ ヒドイメニ アツタコトハ シツテイマス。ロンゲラップニ カエルコトガ デキルヨウニ イノツテイマス」アンジャインさんが読めるよう片仮名表記して書いた。返信はすぐに小宮さんに届いた。ロンゲラップの被曝島民八六人のうち、アンジャインさん一家が最も被害を受けた家族だつた。アンジャインさんも核大国に翻弄されて戦後を生きてきた。

音信が復活した翌年、小宮さんは生きていうちに再会を、とマーシャル諸島に渡り念願の再会を果たした。小宮さんの死後、遺品の中に戦争によつても引き裂けない二人の友情の証として、数々の手紙が残された。

(さわだ たけし/中央大学法学部講師、元毎日新聞記者)

連続市民講座 第2回
いま水爆の時代を問う
～核と向き合い明日へ～

六月一四日、連続市民講座の第二回目（明治学院大学国際平和研究所PRIMEとの共催）が開かれ、大学生など九〇名が参加しました。

コーディネーターの高原孝生さん（PRIME所長）より、自然科学分野を中心にした第一回目へ続き、この回は政治外交、経済を切り口に、多角的にビキニ事件をとりえいくというテーマが紹介され、つづいて三人の報告と質疑応答が行われました。

学芸員の市田真理さんは、公開された外務省外交文書を中心に、第五福竜丸をめぐる日米の外交交渉、放射能汚染魚被害への補償要求について紹介。劇団民藝の田口精一さん、劇団俳優座の飯原道代さん



の協力で、福竜丸に関する国会の議事録に基づいて論戦を再現し、当時の時代と政治状況を紹介しました。

共同通信社編集委員の太田昌克さんは「日米『核同盟』の源流」と題して、アメリカの核戦略の歴史を公文書などの一次資料で分析し、「核の傘」「核密約」の構造を提示。核の被害を受けながらも核に依存する日本の体質と、核軍核と同時に「平和利用」を推進するアメリカ外交戦略の源流と帰結を明らかにしました。

静岡大学名誉教授の山本義彦さんは、五〇年代の経済界の動向を統計資料等で紹介。サンフランシスコ講和条約締結前後の経団連、経済同友会

などが出した意見書から、日米経済界の協力体制の形成と第五福竜丸の被災がもたらした影響を分析しました。財界主流は再軍備により経済復興を目指していたが、第五福竜丸の被ばくによりそれが容易にできる環境ではなくなったと指摘しました。

山本報告の詳細は最新の論考「第五福竜丸事件の政治経済学」（年報・日本現代史）で読むことができます。いずれの報告も、現在の外交・経済の状況とオーバーラップするもので、次回以降の講座へとつながっていきます。

一九七六年、六月の展示館開館に先立つ三月に発行された『ビキニ水爆被災資料集』（三宅泰雄・檜山義夫・草野信男監修 第五福竜丸平和協会編 東京大学出版会）が、新装復刊されることになりました。

本書は医学、物理、化学等の自然科学論文を多数収録しているほか、内外の公文書、乗組員の手記や手紙なども紹介。世論動向や原水爆禁止運動、船の保存運動にいたるま

■第3回 7月19日（土）
〈グローバルフォールアウトと放射線被ばく〉

- ◇ロバート・ジェイコブス 「水爆実験が与えた核開発者と市民への影響」* 逐次通訳
- ◇高橋博子 「米国の水爆開発、その実態と隠蔽の実装」
- ◇振津かつみ 「世界の核実験による被ばく被害から」

■第4回 9月6日（土）
〈核兵器と科学者、市民、被爆者〉

- ◇小沼通二 「ビキニ事件と科学者」
- ◇樋口敏弘 「核実験と欧米市民・知識人」
- ◇川崎 哲 「核なき世界の胎動—2015NPT 再検討会議へ—」

*いずれも13時～17時 *資料代500円

会場 明治学院大学白金校舎 本館10階国際会議場

お申し込み・問い合わせ 第五福竜丸平和協会
電話 03-3521-8494 FAX03-3521-2900

連載⑤
晴れた日に
雨の日に
山村茂雄

（承前）
第五回原水爆禁止世界大会（一九五九年）は広島で開かれました。この大会パンフレットに岡本太郎さんが提供した挿絵は、代表作「燃える人」の下絵のようだと岡本敏子さんが話されたことは前号で紹介しました。

四年ぶりに広島で開かれる世界大会、開催地広島に合わせいくつもの行事が組み込まれました。大会記念美術展「日本人の記録」もその一つでした。岡本太郎さんはここに「燃える人」を出品します。一九五五年日本国際美術展の出品作品ですが、その制作には、ピカソが「ゲルニカ」並の作品を出すという話を伝えて聞いて、それならと描いたのが「燃える人」という話も前



号で紹介しました。

「日本人の記録」展（企画原水爆禁止日本協議会、主催朝日新聞社）は、世界大会日程（5〜7日）をはさんで八月一日から七日まで広島市の朝日会館で開かれました。絵画二四、版画三、彫刻六、写真二三、グラフィック・デザイン一三の六九人の作家が出品しました。題名の「日本人の記録」が示すように戦後社会、原水爆、平和を主題にした作品、代表作、話題作が出品されたのでした。

この企画にあたった美術評論家の瀬木慎一さんは、出品作は「作家の立場によって表現の仕方も多様だが、共通して、戦後日本の社会と人間の姿を鮮明にとらえたもの」で

あり、表現された「芸術家たちの感動は、とりも直さず、ひとびとの共感であるでしょう」と述べています。同じく写真評論家の重森弘淹さんは、原爆は「われわれの内面の深いところに、消えることのない翳りを刻みこんできた。その翳りに多角的に光を当て、翳りの深さと強さをくりかえし」記録する必要性をのべていました。

* 一枚の写真があります。「日本人の記録」展会場のスナップです。写真左でカメラを肩に作品を観るのは岡本太郎、編模様のシャツ姿は土門拳。土門さんは美術展に前年発表の「ヒロシマ」を出品していました。親友の二人が連れだつて「日本人の記録」展オナーリングあわせて広島を訪れたのです。写真には土門さんに隠れて重森弘淹さん、右端の腕組みは瀬木慎一さんです。もう一枚は、宮島を、観光する岡本さん（左端カメラを構えている）と土門さん（右端ステッキをさげ）。土門さんの左に重森さん、その左は山村です。



（写真はいずれも粟津潔）

写真で見られるように岡本さんは若々しく、土門さんは「紅葉饅頭」を頬張りながらの宮島散策でした。

土門さんはこの年の一月からカメラ毎日に「古寺巡礼」の連載を始めていました。岡本さんが沖繩を訪ねるのは、この年一月から二月、翌年中央公論に「沖繩文化論」忘れられた日本」を連載、話題を集めました。

* 八月二日には、「日本人の記録」展関連行事として「美術映画と講演の夕」が開かれています。主催は中国新聞社、会場は当時繁華街にあった中国新聞社ホール。岡本太郎さんの演題は「絵画とドラマ」、土門拳さんの演題は「写真家の社会的責任」。映画は「ゲ

ルニカ」（監督アラン・レネ）が上映されました。

「日本人の記録」展の出品作家を紹介する紙幅がありませんが、ひととくまに記せば、絵画には内田巖、鶴岡政男、森芳雄、吉井忠、丸木位里、俊、横山操、版画の棟方志功、彫刻は本郷新、佐藤忠良、建島覚造、写真には木村伊兵衛、田村茂、浜谷浩、林忠彦、東松照明、グラフィックでは亀倉雄策、伊藤憲治、山城隆一、粟津潔、杉浦康平の各氏など錚々たる顔触れです。

ビキニ水爆被災関連の作品には、絵画に阿部展也「雨が降る」、高柳博也「黒い雨」、竹谷富士雄「暗い海」、土屋幸夫「灰鬼」、中谷泰「焼津の家族」、版画に新海覚雄「ストロンチュームの恐怖」、写真では川田喜久治「焼津」が出品されています。

* 美術展は、広島市民に大きな贈物を残します。平和公園に置かれている「嵐の中の母子」像は、この美術展出品を機に、本郷新さんの希望に沿って日本原水協を通じ広島市に寄贈されたのです。

ラッキードラゴン・クイン テットが演奏されます

ビキニ水爆実験 60 年の秋の企画「アートな第五福竜丸」の展覧会としてイラストレーター・デザイナーの黒田征太郎さんの BIKINI、第五福竜丸作品のアート展が開催されます（10月10日～）。また、この企画の一つとして記念コンサートが、10月26日（日）午後4時30分より開かれます。第五福竜丸に捧げられた林光さんのピアノ五重奏曲「ラッキードラゴン・クインテット」が完結版の演奏以来5年ぶりに船体に響きます。また演目として、1958年に初演された野外劇「最後の武器」（安部公房作、林光音楽、千田是也演出）に挿入された合唱曲を半世紀ぶりに蘇らせることが検討されています。

焼津と串本で 第五福竜丸パネル展

ビキニ事件・第五福竜丸被ばく60年を記念する事業として、第五福竜丸の母港・焼津市と建造の地だった和歌山県串本町で第五福竜丸の展示パネルや資料の展覧会が開かれます。

焼津市の展示は、歴史民俗資料館にて「第五福竜丸—2014年、平和への願い—」と題して同資料館が所蔵する被災当時の市の資料、市衛生課や産業化の調査、被害者対策協議会の議事録、外務省とのやり取りの記録、水産業者の保障を求める陳情書や市民の原水爆反対の署名簿、乗組員の保障に関する資料など70点が展示されています。会期は5月から9月末まで。

さらに6月21日から30日までは、特設展示室で第五福竜丸展示館制作の展示パネルと死の灰、日誌類のレプリカなどの展示がおこなわれます（右欄の写真、提供・焼津市歴史民俗資料館）。パネルは第五福竜丸の被災、汚染魚や放射能雨、マーシャルの被害、原水爆禁止の声の広がりなど42枚。マーシャル諸島の子もたちの表情を伝える

写真パネルとロンゲラップ島の被ばく者の訴えのパネルなど20枚から構成されています。30日には市主催の「6・30市民集会」が開かれ、映画「放射線を浴びたX年後」の伊東英朗監督が記念講演します。



第五福竜丸は古座造船所にて建造、現在の串本町古座です。同町主催による特別展示「第五福竜丸—「死の灰」あびた木造漁船とマーシャルの人びと」が開催されます。会場は町立文化センター、8月9日から14日までで第五福竜丸展示館の学芸員によるオープニング記念講演も予定されています。

展示は、Part 1「第五福竜丸 水爆実験に遭遇」、Part 2「第五福竜丸 串本・古座から夢の島へ」、Part 3「マーシャルの核被害・世界の核実験」、Part 4「死の灰あびたロンゲラップの人々の歩み」の4部構成で、現物資料も「死の灰」など20点ほど展示、同町が所蔵する第五福竜丸建造に使用された船大工道具も展示されます。

展示館に建築家協会25年賞

展示館の建物が日本建築家協会の25年賞を受賞したことは3月号にて紹介しましたが、5月23日に授賞式



がおこなわれ、設計者の杉重彦さん（協会顧問）と川崎昭一郎代表理事が出席し、賞状が授与されました。写真は杉重彦さん。

2014年度評議員会開く

公益財団法人第五福竜丸平和協会は、5月18日、学士会館にて定時評議員会を開きました。議長には高原孝生評議員が選出され、川崎昭一郎代表理事より2013年度の事業報告ならびに決算報告について報告があり質疑討論のうえ承認されました。

昨年度の来館者は99,071人、学校見学は379校、市民グループなどは346団体でした。また福竜丸被ばく60年に向けての記念事業として『第五福竜丸は航海中』の出版、「記念のつどい」の開催、市民講座などの取り組みをすすめたこと、それへの寄付が340万円にのぼり重要な貢献となったことなどが報告されました。

会議には評議員6名、理事2名、監事1名と事務局2名が出席し、今年度の事業および財政計画についても意見交換をすすめました。また評議員の大石又七さんが久々に出席し、去る3月にマーシャル諸島を訪問したこと、現地の被ばく者との交流の様などについて話されました。

平成25年度正味財産増減計算書 単位(円)

経常収益(合計)	25,845,655
基本財産運用収益	2,125
事業活動収益	19,582,979
受取会費	1,768,000
受取寄付金(含む記念事業募金)	4,470,672
雑収益	21,879
経常費用(合計)	24,834,923
事業費(計)	23,023,855
公益目的事業 (展示保存・資料収集・普及広報)	19,731,669
その他の事業 (出版物・記念品頒布)	3,292,186
管理費	1,811,068
当期経常増減額	1,010,732
当期在庫高増減額	1,990,784
当期一般正味財産増減額	3,001,516
一般正味財産期首残高	20,310,040
一般正味財産期末残高	23,311,556
正味財産期末残高	23,311,556